

(5) 学年公開授業を終えて

(1) 公開授業を終えての生徒の感想。

* 学年全体で差別を無くそうとする動きになってよかったと思います。人の差別に対する気持ちが、発表することによって表われたのでその人の考えや気持ちの豊かさなどがわかったような気がします。そういう中で自分にとっての考えがまとまっていくような気がしました。差別をこの世の中から無くすことをしなければいけないと思いました。

* 人前で意見をいうこと、自分の意見を人にいうこと。自分の意見を自分の口からいうこと。言葉でしか伝えられないのだから自分の気持ちを素直にいえるようになったということが自分にとってプラスになった。

* こんなことは初めてなので戸惑ってしまい正直いって「しんだい」と思った。眠くなったときもあった。だけど少しづつ興味を持ってきて公開授業が好きになっていた。その理由はいろいろな人の意見がきけるからです。とくに2Dの公開授業のときは少しだけ自分の意見をいうことができました。公開授業をやっているショックな事がありました。Mさんの事です。こんなにも近くに悲しんでいる人がいることを知ったときは、今まで私は何をしてきたのだろうと思いました。その上に私がMさんのなんの支えにもなることができなかつたのがもつとつらかったです。私もMさんにとっては差別をしている一人だったのでしょうか。わたしがMさんのことを知ったときから意識するようになったような気がします。だけど、自分でも少し成長したような気がします。私が「Mさんを慰めることさえできないわ」と言ったらある子が「ホンナ事よりMさんはIさんが正しい考えを持ってくれる方がうれしいと思うよ。」って。心の中の「私何をしたらいいのだろう。」という疑問が少しだけ溶けたような気がしました。だけど、やっぱりMさんに何もしてあげることのできない自分が情けなくなります。

* 自分はこんなにたくさんの人の前で自分の意見を言えるんだと自信が付いた。それと同じにみんなの一つの事に真剣に考え取り組むことがこんなにすばらしいんだと感じた。

* 学年全体で取り組むということは他のクラスの意見が聞くことができるという点がとてもいいと思います。僕達のクラスでは少数の意見でも他のクラスではどんどんできてきていることがわかったからです。それに学年全体で考えるからより深く考えていくこともできるし、思いもよらなかつたいい意見もできます。

他に思ったことはもう少し周りにも時間をくれて多くの人に意見を言ってもらったほうがいいと思います。人それぞれ違う考え方を持っているからです。言いたかったのに言えなくて後悔している人もいると思います。2Dの後には他からもいっぱい意見が出てとてもいい感じだったと思います。今度の公開授業もこの前みたいに活発に意見がだせ

たらいいと思います。僕も頑張って意見を発表します。

* 自分の意見が発表できて、友達に聞いてもらえた。多少恥ずかしかった。けど自分の意見を聞いてくれる人がいたからうれしかった。それからの僕は、発表するのはあまり恥ずかしくなくなった。

* 私ははっきりいって公開授業は嫌いでした。2時間もの時間をとってするのだったら、なわとび大会や学級対抗のゲームをするほうがみんな自然に楽しくやっていけるんじゃないかと思っていました。でも今が楽しくてもこれから社会にでて差別にたちむかっていかなければいけないとても大切なことだと思いました。そして、私が普段どんなに人を差別していても、この時は差別を受けている人と同じ位置からいろいろなことを見ているのだと思いました。だから、人の気持ちを考えるということの大切さに気がつきました。3年生になってからもやっていきたい。

* 自分の考えだけでなくたくさんの人の考えが分かったのでよかったと思います。自分の考えでは分からないところがたくさんあるのでみんなの考えで自分をもう一度みつめなおすことができました。

* 他のたくさんの友達のなまの声でその人の考えを知ることができた。みんなに自分の思っていたことを聞いてもらい考えを深めようということではないかと思う。聞いている中で知らず知らずのうちに差別しているのだとか、自分自身の考えのなさにもっと考えなければいけないと反省もできました。いろんな人の声を聞くことで自分の考えが少し、ホンの少しだけど深まったと思います。

学習会の事とか聞かれるとドキッとしながら答える。差も、差別に負けてないかのよう。けど、内心嫌われたらどうしようとか、無視されたらどうしようとか、差別されないかとひやひやしている。気持ちの10分の7まではこのまま部落差別の事には触れたくないと思っている。10分の3は少しでもそういう気持ちをなくしたいと思う気持ち。2年になるまでは10分の8までは逃げ出したい気持ちだったけど今は10分の7。10分の1、ほんとに少しだけ私にとっては大きな進歩だと思う。みんなのなまの声を聞いて、私と同じだ、逃げてはいけないと少し思い始めた。みんな真剣に考えているのに私だけがそっぽを向いていてはいけない。みんなの思いを聞いていると胸が苦しくなった。そういうことを感じる事ができたということは私にとってとても大きなプラスになったと思っている。

* 私は今まで差別をしてきたと思います。小学校の時も一人の子がみんなにいじめられているのに私はいじめの側にたって自分自身いじめるのを悪いことと思わずそれが普通なんだ、もし、私が「いい子をしたら私までいじめられてしまう」と思っていました。でも中学2年生になって本格的に部落問題について学習していく中で今まで私がしてきたことはとても普通とはいえない恥ずかしいことだったと気付くようになってきた。

* 今までの自分が情けないということに気付くことができ、そしてこの授業を通して自分を変えていきたくなる気持ちが生まれました。ごく身近な部落差別を怖がらず、僕にはここにいるみんなが仲間なんだという勇気と自信が付いたように思います。

* この一年間、これだけ同和問題に真剣に取り組んだことは初めてです。中1の時も真剣には取り組んでいただけ、今までのように全体に取り組んできたことでどれだけ必死になったことか。やっぱり言葉だけの形で残すのはいけない。あたりまえのことだけど、もっともっと堂々と行動に表したい。

* みんなでやってきたことは一人一人の心の中で勇気を分け与えていったのだと思いました。これからもみんなと一緒に話し合っていきたいと思います。人にはそれぞれの思いがあるけれどみんなの心は一つに団結していることが分かりました。みんなの意見を聞き私の思いに輪をかけてくれたように良い方にずんずんと進んでいると思います。だから自分の心の中にある悪い心がよい心と戦いあってよい心のほうが勝ってきているのでもっと学習し差別されている人の気持ちが分かりあえるようにしたいと思っています。

* 学年全体の公開授業はすごく大事だと思います。今までのクラス単位の授業ではどうしてもだらけてきたりするので、こういうやり方ならみんなの前で発表するのにもなれるし、より多くの人の意見を聞いたりすることができるからです。他のみんなの意見を聞いて自分も頑張ろうと励みにもなりました。

* 一人の意見を2年生全体で聞くというのはとてもよい。やはり2年生全体で取り組めばすごい大きな力になると思う。3年生になってもこんな授業をしてみたい。いや、しなければならないと思う。

* 体育館での授業は私にとってすごくプラスになりました。私は今まで友達と話しをしていて他の子にたいして言うてはいけないこととか、差別的な発言なんかが出たりすると「あっ、そんなこというたらあかんよ」とかいろいろ言えるようになりました。友達はどう受け止めているかは知りませんが私なりに、今までは差別を受けてうじうじしているだけであつたけど今は少しだけ言えるようになったなあと、自分で言うのもなんだけど進歩したと思います。

* 体育館で緊張して授業していく中で本当に自分が反省しなければいけないことなどがたくさんできます。人間としての生き方を学び取ることによって個性や自分の心の中に思っていることまた他人の思っていることを互いに語り話し合っていくことのできる人間への長い長い道の中での大切な一つの峠の勉強ができて本当に自分自身プラスになりました。

* 私は自分自身どこがよくなったっていうのはわかりませんが変わった点があります。今まで私は思っていることをきれいな言葉で片付けてきたけれどそれは間違っていました。自分の心の醜い部分を隠そうとしてきたけれど今は少しずつだけ本当の思いが言えるようになりました。

* 現実の差別を思いしらされました。友達に苦勞している子がいるなんてしなかったんです。涙流す子もいたり声が震えている子もいました。前の私だったらその子たちの事をやすつぱい同情でしかみなかったと思います。でも、この前の研究授業では同情の目では見られませんでした。言葉で言い表せない気持ちが心からあふれていました。本当は自分でとてもびっくりしました。これでこそ同和問題に取り組んできた意味があるんだと思います。

* 学年全体で同和問題に取り組んできたのは同和問題とは何か、部落差別とは何かをみんなで見つけるためだと思います。同和問題に対する取組みをみんなで考えるためだと思います。

* 僕は今まで緊張して言いたいことがはっきりと言えませんでした。でもたくさんの授業の中で手を挙げて発表するようになりました。前の事を思うとすごい進歩だと思います。自分でも思います。これからもっとはっきりと言葉にしてしゃべりたいと思う。もっともっと知識を付けたいと思う。

* みんなの注目する中で堂々と意見を發表したことが誇りになり、差別がどうしたら無くなるかが少しずつ分かってきた。しかし、意志のなさで意見を發表できないこともあった。けど、差別に反発する気持ちを持てるようになった。

* まず自分のクラスだけでなく2年生全体という大勢の中で自分の意見がしゃべれるようになった。また、自分のクラス内の人たちだけでなく他の人たちの意見がたくさん聞くことができた。そして、担任の先生だけで無く他のクラスの先生方の同和問題の考え方、授業の仕方がどういうものかということも学べた。

(2) 公開授業を終えての反省と考察

① 公開授業は同和問題学習にたいしての生徒の意識の変容に大きな力となった。

全体で取り組むことにより連帯感の芽生えが見られ他人の意見に触発されながら前向きに取り組もうとする姿勢が生徒の感想からもうかがえる。毎月の自由作文にも同和問題について自分の思いを書く生徒が後になるほど多くなってきている。全体の前で意見を發表していくことは自分を作り上げていくことである。クラス単位であればここまでの盛り上がりは無かった。「みんなでやっていく」ことの意味は中学生に取っては我々教師の考える以上に大きい。最初は抵抗のあった生徒も全体で取り組むことの意味をつ

かみ積極的にクラス単位以上の高まりが見られたように思う。

② 自分の意見を発表することの意味と発表することによる自信が生まれつつある。

生徒の感想に見られるように全体場で緊張しながらも自分の意見が発表できた事実は自信につながっている。公開授業の後の全体学習は、いわばシナリオも何も無いものであった。しかし「実践記録」の④⑤にみられるように考え考えしながら自分の思いを語ることでできる生徒が増えてきた。基本的な発表訓練の無いままの全体学習であったが実践の中で鍛えられつつある。

自分の意見が右に左にゆれ動きながらも思いを出していくことができ初めて同和問題解決の一步を踏み出すことができることを生徒はつかむことができた。

③ 生徒も教師も常に同じレベルでの取組みができつつある。

クラス単位での実践や研究授業であれば、該当しないクラスの取組みはどうしても弱くなる。しかし全体授業では同級生すべてに見られているという意識のため単なる研究授業以上の取組みが為されたし、参観するクラスにしても後の全体授業のために真剣な取組みをせざるを得ない。5クラスの公開授業で5資料を使ったがどのクラスにおいても該当クラスと同等の取組みであった。全体授業はすべてのクラスのレベルを引き上げるに大きな意味があったと考えている。

我々教師にしても同じことがいえる。授業者の指導案をもとに参考になる本をよみ授業展開について意見を交わした。このことが大きな力になった。「ミナコ逃げるな」ではミナコの生き様についての職員室での意見交換の声があまりにも大きかったため同名の先生が不審に思ったという笑い話もある。この取組みが無ければ自分の授業のみの取組みで終わっていたかもしれない。そういう意味で我々自身の極めて実践的な研究にもなった。

④ 全体学習について

一年間で5回の公開授業があり全体授業があった。そのうち初めの3回は全体授業にとる時間が20分ほどと少なく、目的を考えた場合には不十分なものであった。20分で挙手、発言などの形の面と内容についての検討を加えることは難しい。そこで4回目より時間を1時間いっぱい取り、内容についての全体での話合いに重点を移していくことにした。このことによって①から③までのプラス面が浮きでてきたと言える。そこで回を重ねるにつれて得ることのできた教師としての立場における成果や教訓は次のようなものである。

・公開授業の授業者と全体授業の授業者は変わることに。

2時間続けて一人の教師の授業は厳しいということと同時に一つの資料であっても捉え方は少しずつ異なりニュアンスも違う。この違いを生徒がつかんでいくことも大切である。最高3人の先生の授業を同一資料をもとにして受けることになる。生徒はいろいろな考え方や感じ方をすることになるし、それはまた私たち教師自信を鍛えることにもなった。

・全体授業における発問は公開授業と同じものは避ける。しかし、公開授業において問題になった点について更に深める内容についてはむしろ必要である。要は、公開授業

の繰返しにならぬようにしなければならないということにある。

- ・ 挙手したものを指名していくことによって初めて他の生徒の発言を誘発していくことができる。受け身の姿勢では200人近い生徒・教師の見ている中では発言が弱くなる。そのためには、初期の段階においては学級役員などに協力を依頼しておくことは大切である。実際、後半の全体授業においてはその方法によって多くの意見を引き出すきっかけを作ることができてきた。

挙手して発言することは生徒にとって大きな勇気のいることである。

「今日は非常に緊張していつもと違うものがありました。手を挙げるのは勇気が本当にすごくいると思いました。最後に心につまっていたものをやっとの事で手を挙げる勇気がでて、手を挙げることができました。そして今日も語ることができました。書いたものを読むだけでは相手に本当の気持ちは伝わらないと思いました。最後に手を挙げたものの手に何か錘が付いているのかと思うほどとても重く思いました。自分の手がどうしてこんなに重いのかと思ったくらいです。そしてやっつという感じで自分の心の中でつまっていたものを吐き出すことができました。」

これは生徒の「あゆみ」である。挙手をするのはこれほどのプレッシャーを生徒に与える。だからこそ挙手して発言することに意味がある。

生徒が発言せざるを得ないような資料分析やそれに基づく発問が要請されることは言うまでもない。

- ・ 全体授業における指導案の問題がある。その性格から既に述べたように前もって指導案を立てないで授業に臨む方が望ましい場合があるが、原則としての案は立てておく方がよいかもしれない。これについては今後の研究課題の一つである。こん年度は指導案を立てることなく授業にはいった。指導案を作成するとすればどのようなものが望ましいか考えていきたい。
しかしながら反省点も多い。

① 公開授業そのものがまだまだ不十分である。

一つの授業として捉えた場合、教師の立場からいえば技術的な面でまだまだ研究の余地がある。生徒の発表においても事前の研究プリントの棒読みに終始する生徒も多く意見がかみあうことが少なかった。その点ではむしろ全体授業において活発な意見交換が見られた。生徒の基本的な訓練と共に、私達の同和問題学習に対する取組みの甘さを克服することと考えるべならぬだろう。私達自身の思いが生徒の意識に迫いつきかねている部分もあるように思う。今後の研究課題である。

② 既に触れたが形式的な発表訓練の必要性がある。形式的というのは声の大きさであり、挙手であり、起立しての姿勢などである。これらを内容ときりはなした形でなく並行して訓練する必要がある。なぜ挙手をするのかを考えさせながら形も整えていきたい。これは自分たちの思いを語り相手に理解してもらうための必要な条件である。

③ いろいろな考えを持ったおおくの生徒が居る。発言したくとも手のあがらない生徒が居る。この生徒の気持ちをどのようにして引き出していくか。口にしたくともできない思いをどのように全体に伝えていくか。私達自身の課題として考えていかなければならない。